

八笑人茅五編

村田 十三 上

13
3094
13



特
へ 13
3094
13

村田



一筆算主人戲作
一勇齋國芳画

隅田堤の
秋の七草
虫の音の
囀を聞せの
砧の音を野狸

花暦八笑人第五編

書肆 文永堂壽梓

史記しきに滑稽傳くわきでん有素滑稽すくわきの辯捷べんせつの人ひと
是ぜを非ひの若ごとく非ひを是ぜの若ごとく同異どういを乱みだすを受うを言い
洒落しやらくの物の洒落しやらくを汝なせ意いの山谷さんくが周氏しゅうし叔しやくを存ぞんて人ひと
品しん甚しん言ごん胸中きゆうちゆう洒落しやらくる度た光風くわうふう霽せい月の如ごとく這まる更さら物もの
小負せうぢや着ぢやせむ串戲くわんぎ交かうは同流どうりゆうぬ遊あそぶを洒落しやらくへ入いるも急いそべ
さう旧友きゆうゆう就しゆ亭てい鯉り文ぶん子しの常じょうふ滑稽くわき洒落しやらくを弄あそび世よの中ちゆう
を練ある皮かわと書かく閑暇けんげの筆ふでを弄ある策さく子しを著ある

をり所謂しゆゐ花曆かにき笑人わうじん滑稽くわき和合わがわ入い大山道おほやまみち中ちゆう紀き營えい
根柢ねんぢ等らう則すなは是こゝ之こゝ克かつ者しやく官くわんの腮あはを解とけ腹はらを抱かきをりり
童戲どうぎ人の稱なづき聞きく聞きく惜おしむ所ところ居まる黄泉やうぜんの移うつり
よる其その遺い行ぎやう絶たて有ある変へん途と発はつ客かく遺い感かんも堪たむ此こゝ頃ころ
予よ其その嗣し作さくを乞こり従したがふ孤こ陋ろうして世よの流行りゆうぎやうを知しる
拙せつき著作ちやくさくを以もつて木き子し竹たけを接つ誹ひ謔ぎやくを得える先せん板ばんの評ひやう求もと
まを賤せんき基もととあじと固辭こごして雷らいふ志しをばらけり

滴真字に笑人の腹稿を詮柄に聞は有りと大
概を板元は告るに原稿を脱せよと再元の求然其難
然ども机上繁多の故を以て筆を採の違あり既中冬小
至の頃硯を是が為に發し二頁二頁草稿成を備
書削刷を勞て以て新春祭兒の售買に附を
蒼卒の間疎漏急迫して校正小給暇あり他の胡慮
とあるは更慙愧の堪むと雖も唯其遺意を次懐旧

の情を述ふ所の白樂天が舊詩巻を感し十人の
酬和九人とほしと吟ぜり憶ありて何しかつあるに數
その世の中と小町の詠も年歲似つる花は浮氣身の
考を忘るるに護み亮筆をまきしは更志のあり

東都楓川の市隱

一筆蒼卒主人誌

維時丁未年仲冬稿成己酉年新春發兌

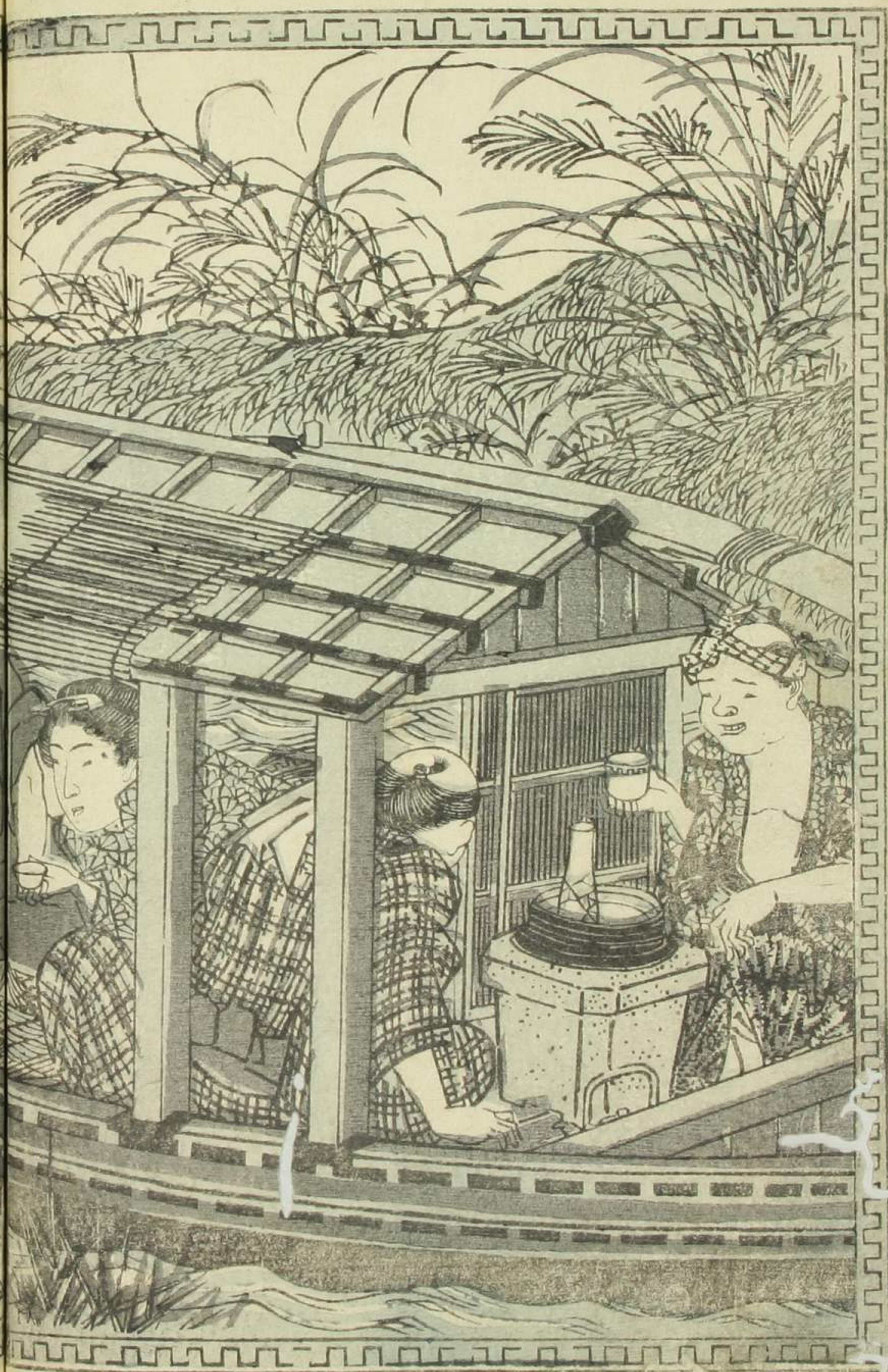
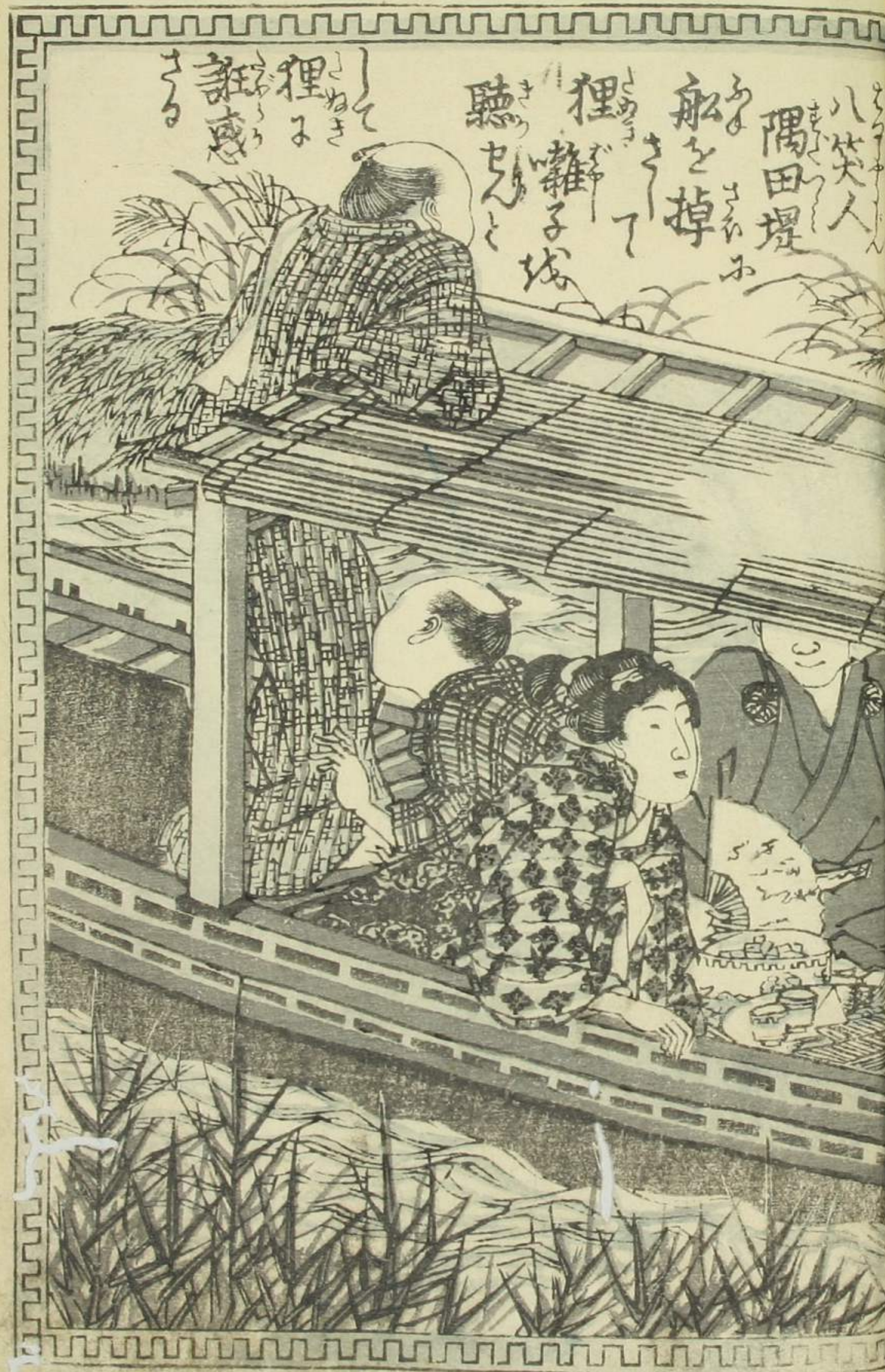


世の
中
の
事
は
何
れ
も
借
り
の
花
の
ち
あ
り
あ
り

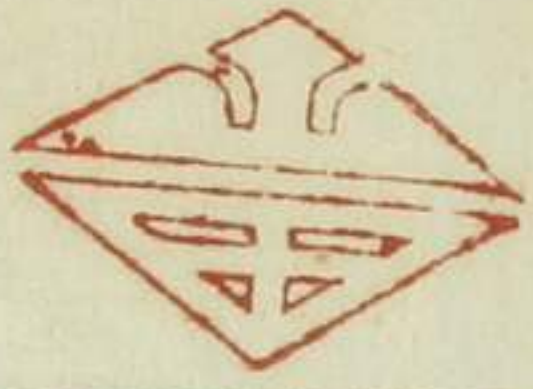


一別以来
八笑人
酒も
夢も
思
ふ
不
思
う
の
事









嘉永二己酉歳新取

大 大なる

小 小なる

及具大者小

大徳 大なる徳

大徳 大なる徳

大徳 大なる徳

大徳 大なる徳

大徳 大なる徳

大徳 大なる徳

大徳 大なる徳

大徳 大なる徳

正

正



初編 初編

笑人の 笑人の

花 花

八 八

笑 笑

人 人

第 第

五 五

編 編

卷 卷

之 之

上 上

隅田堤の秋の七草の
虫の音のねり
聴月見船の滑稽

世の砧のおと
野裡

コウ左 コウ左

花 花

八 八

笑 笑

人 人

第 第

五 五

編 編

卷 卷

之 之

上 上

花曆八笑人第五編卷之上

江戸 一筆茶主人戯編

世の中の義理も縁仇も
草も構つて
目を送る

ついでまきて来て出候と白下七輪ありともりあうり水
あり一と三輪をきりてまきし一酒を止て戸をあけりし
一を歩ゆらちり戸ヨコヨクえね入梓屋の宅ハ寺ノ裏
一晴一がらナア 終極の入あり 昔
春のまきねのりし白下と云ふ一昔
おとこのまきねのりし白下と云ふ一昔
撰曰と撰曰と二種あるし一昔
なすト出りざる大和屋一昔
八五ノ上ノ二

二種あり二種あり一昔
一撰曰と撰曰と二種あるし一昔
なすト出りざる大和屋一昔
八五ノ上ノ二



遊戯の
 友垣の
 蓮池の
 亭子金



八五八上ノ四

のごつちあらへ先陣より後殿をさるまじよ（首）とせんづりより
 舞ついでか花形やまきらうの柳丁も（首）「ちりびりお入るまは
 柳丁かほさんぜんの林森あぶの足（ま）の思ふ性む性良松と
 中ものゆえと（能）「能きやうげん（ま）のまねをきかしくあうまあつて
（ま）をこそあがりしとさとひまきまどの中あぐん七
 七やんをあをきと「あにせぬさうとぶ唐（ま）のおみけ事へども
 へしつもの（ま）「これより八人のあまはらのちがあひあひあひのま
 ありのうらな申ひおどろくぬき「あにせんぬくさうかうわさ
 のまよんかんがうあはるささ「あにせんぬくさうかうわさ
 そらうしあうさうもさうさう「さ田のあをんぬきまげ

八五ノ上ノ六

（卒）「七まねのびのむらねをさ菜ふ境へ陣をささうら
 れあ合さるらあ（首）「全体は度河波公のあむぢ
 ねれさう油ひりふまをきかおるのよ「アア菜むんも
 のが形さう（ま）「あまのまのまま（ま）「りきさかま
 宗公明ご（ま）「大こんをくあら九紋竜う音智海ご（ま）「春
（ま）「倒しの豪華ちよとさあ合ても一辨づも春さう八辨
 人とののらうら（首）「ナニらうとあう（ま）「あ合づさ
 へ合あや生らあ（首）「ナニらうとあう（ま）「あ合づさ
（ま）「倒しの豪華ちよとさあ合ても一辨づも春さう八辨
 人とののらうら（首）「ナニらうとあう（ま）「あ合づさ
 へ合あや生らあ（首）「ナニらうとあう（ま）「あ合づさ
（ま）「倒しの豪華ちよとさあ合ても一辨づも春さう八辨

みるらうらうらう一六合うイヤ七合とと極とわらう七のふぞら
めんて 目玉の七福神七福万宝七人様と七賢人天神
 七代地神ちぢんちぢんく一 地神雷のトらひらうらう
をアテ 蘇部父の二れうらう八賢人を七合神と世素儉約
 ふ極やうらうやアおらう一おそき入谷の七合神と一うらう
 ぶりけりる程のそらうらう時を頼むうらううけりあふ
 めんぞく一あふ極をつらまらふやアおらうらうに兼ふは
 一酒をうらうおそきを書一と居らうらうの地をうらうらうとあると

うらうらうらうの神の意うらうらう酒蔵の氏神様(聖加の
 一あふ一甚奇うらうらううけりあふうらう生母のため
 それうらう一うらう森仲うらうらううらううらううらう
 を奉納一と八人の名をのうらう一とあふうらうらうらう
 古のあふうらうの氏神の今のもそれ入谷の鬼子母神極うらう
 新青倉の度極面をうらうらうらうらうらう酒蔵一と付て二十
 四又十六又八又とあふうらうの甲乙を付てあふうらう残をあふ
 めて顔面の奇もあふうらうも付てあふうらうあふうらう七も



あをくら
阿波を序
ちやん
茶番の
しん
類向と
めがくる



八五八上ノ十三

中へは只ひしきじつな決さんどうしらす一月を
あつちやアあーうくお入る天目ちくろとから
おまをんどうく味方よりらう「H. S. S. の」
でもるのせまをんくをせ入る日「H. S. S. の」
あめの中へしきじつな決さんどうしらす一月を
あつちやアあーうくお入る天目ちくろとから
おまをんどうく味方よりらう「H. S. S. の」
でもるのせまをんくをせ入る日「H. S. S. の」
あめの中へしきじつな決さんどうしらす一月を
あつちやアあーうくお入る天目ちくろとから
おまをんどうく味方よりらう「H. S. S. の」
でもるのせまをんくをせ入る日「H. S. S. の」

風呂吹ぬあつ福人の「細」の「糖味」よ「波」
大根や相根ハ「大根」あつ「ち」
せぶともしら「あ」あつ「ち」
他地のゆと「あ」あつ「ち」
まてぬ「あ」あつ「ち」
あつ「あ」あつ「ち」
の甲より年の功ど本練の筋をまいて「あ」
う「あ」の「あ」あつ「ち」

ひあひ合せ「あはま膏を強と丸で癢うまじし」そして妙な
尾筋みるをさしゆもの「*Wagon*」大かみ「*Wagon*」
まじりかき「*Wagon*」本よきを造り「ちやア」*S. S. C.*「せ」
て「程のを中」とさあ「*Wagon*」逆原の時をまをむ「*Wagon*」
しふとり後教とりあがり「*Wagon*」桶の底を叩くやうな
まをさせ「*Wagon*」でまをさる「*Wagon*」まをさる「*Wagon*」
「*Wagon*」内へ送入とま「*Wagon*」改の上で「*Wagon*」
八五ノ上ノ十

逆原の教を止てま教ふあり「*Wagon*」酒落てゐるまや
ね「*Wagon*」「*Wagon*」「*Wagon*」
「*Wagon*」その先の菜切庵「*Wagon*」
くの轆子が入用「*Wagon*」桶の底のやうな大小の教斗あり
一雨小を教むより「*Wagon*」一雨三味線入のを中と清え連
中の清よりと強へ「*Wagon*」
「*Wagon*」
「*Wagon*」

